

# 現代中国語における「美」という漢字の動詞性獲得について

胡 新祥

## 1. はじめに

現代中国語において「美」という漢字は「美景」「美人」「美貌」といった言葉が示しているように、普通、形容詞の性質を持つものと意識される。よって、「美景」「美人」「美貌」はAN（形容詞 - 名詞）の構造で、「美しい景色」「美しい人」「美しい容貌」の“モノ”を表す。一方、数こそ少ないが、「美容」「美髪」「美甲」など Beauty salon 関係の言葉はかなり特殊であり、VN（動詞 - 名詞）の構造で、「容貌を美しくする」「髪の毛を綺麗に手入れする」「爪を綺麗にする」「コト」を表す。

最新版の『新華漢語詞典』『現代漢語詞典』などは、「使変美」、或いは「使美麗」のように、「美」という漢字の動詞性を正式に認めている。中国語では古来より形容詞の性質を持つ漢字を臨時的に動詞に転用することがあるが、それはあくまでも文章表現上の技法に過ぎない。「美」という漢字のように、正式に動詞性を獲得できた字例は皆無である。そのため、「美」がどのようなプロセスで動詞性を獲得できたかは大変興味深いところである。

なお、日本語のなかでも同じ現象が観察される。やはり「美容」「美顔」「美肌」といった Beauty salon 関係の言葉は、AN（形容詞 - 名詞）の構造で“モノ”を表すと同時に、VN（動詞 - 名詞）の構造で“コト”を表すこともできる。「美」という漢字の動詞性をめぐって、現代中国語と日本語は高度な類似性を見せている。日中両国語の影響関係は如何なものか、疑問点がいくつか浮上してくる。

よって、本論文では現代中国語における「美」という漢字の動詞性獲得に焦点を当てて、そのプロセスと理由を究明するとともに、中日語彙交流の視点から両国語の影響関係をも明らかにしたいと思う。

## 2. 現代中国語における「美」という漢字の動詞性について

現代中国語における「美」という漢字の動詞性について、国語辞典の『新華漢語詞典』と『現代漢語詞典』の最新版で概観しておく。

②使変美：美容 | 美髪 | 美化生活

【美髮】**動** 梳理修飾頭髮，使美觀：美髮師 | 美髮行業。<sup>(1)</sup>

『新華漢語詞典 新修訂版』(2007)

②使美麗：～容 | 美髮

【美白】**動** 使（皮膚等）美麗白晳：～肌膚 | ～牙齒。

【美髮】**動** 梳理修飾頭髮，使美觀：～師 | ～庁 | 美容～。

【美甲】**動** 修剪裝飾指甲，使美觀。

【美容】**動** 使容貌美麗：～院 | ～手術。

【美体】**動** 使形体變美好：健身～。<sup>(2)</sup>

『現代漢語詞典 第6版』(2012)

上記のように、『新華漢語詞典 新修訂版』にせよ『現代漢語詞典 第6版』にせよ、いずれも現代中国語における「美」という漢字の動詞性を認めている。『現代漢語詞典 第6版』を例に見ると、「美髮」（髪の毛を綺麗に手入れする）、「美甲」（爪を美しくする）、「美容」「美体」（体形を美しくする）の四つはいずれもVN（動詞 - 名詞）という構造である。一方、「美白」はやや特殊である。「美」は言うまでもなく「美しくする」という動作を表し、「白」は動作の対象ではなく、動作の結果に当たる。よって、「美白」はVA（動詞 - 形容詞）という構造である。

VN（動詞 - 名詞）であれ、VA（動詞 - 形容詞）であれ、現代中国語における「美」という漢字が動詞性を有することは紛れもない事実である。しかし、筆者の内省、或いは中国人の一般感覚で言うと、「美」という漢字は普通、形容詞<sup>(3)</sup>として認識される。その理由は「美人」「美景」「美貌」「美德」「美称」等のように、我々は日常生活で見聞きする「美～」の構造を有する言葉は何れも「美しい～」の意味を表す。「美」の動詞性と言うと、「美髮」「美甲」「美容」「美体」といった語例を出さない限り、なかなかピンと来ないものである。

「美」は形容詞であるという既成概念は中国人のみならず、漢字を使う日本人にとっても同様であろう。しかし、よくよく考えると日本語のなかの「美髮」「美容」といった言葉は「美しい髪の毛」「美しい顔立ち」の意味を表す一方、中国語と同様に「髪の毛を綺麗に手入れすること」「顔や体付き、肌などを美しく整えること」の動詞性をも有する。しかし、現代中国語における「美」という漢字の動詞性をめぐって、いくつかの疑問点が浮上してくる。

- (一) 「美」という漢字はいつ、どうやって動詞性を獲得できたか。
- (二) 日本語のなかの「美髪」「美容」との関連性は何かがあるのか。
- (三) 「美髪」「美容」は日本語ではAN（形容詞 - 名詞）の“モノ”と、VN（動詞 - 名詞）の“コト”の二義性を有するのに対して、中国語だとすると「美髪」「美容」はVN（動詞 - 名詞）“コト”の一義のみである。その理由はどこにあるか。

### 3. 古代中国語における「美」という漢字の動詞用法

京口瓜洲一水間、 鍾山只隔數重山。 春風又綠江南岸， 明月何時照我還。

日本語訳：京口と瓜洲は川ひとつの間。（あの懐かしい）鍾山はただ幾つかの山を隔てるだけ。春風はわたしにお構いなしに江南の岸を緑にするだろうが、あそこへ帰るわたしを明月が照らすのはいつのことだろう。<sup>(4)</sup>

上記の漢詩『泊船瓜洲』（船を瓜洲に泊す）は北宋時代の政治家・文学家である王安石（1021-1086）の名作である。中国では「千古伝誦，人口膾炙」（代々読み継がれ、人口に膾炙する。）と評される理由は、ほかでもなく形容詞の「緑」を動詞に転用するところにある。第三句の「春風又\_\_江南岸」、王安石は「到」「過」「入」「滿」等の動詞を思案した挙句、終に形容詞の「緑」に辿り着き、ご本人も「可伝世矣」（後世に残せるよ。）と嬉しかったという。

春風又綠江南岸の「緑」と同じように、南宋末期の詩人・蔣捷の「流光容易把人抛，紅了櫻桃，綠了芭蕉。」（『一剪梅・舟過吳江』）も、形容詞の「紅」と「緑」を動詞に転用することで千古の名作と評される。日本語のような語尾活用を持たない中国語では、形容詞、ないし名詞を動詞に転用することは古くからあった文章の技法である。

それでは、形容詞の「美」を動詞に転用した例はなかったのだろうか、答えはあったのだ。『戦国策』の「鄒忌諷齊王納諫」のなかには下記の下りがある。（下線と番号は筆者による）

鄒忌修八尺有餘，而形貌昳麗。朝服衣冠，窺鏡，謂其妻曰：“我孰與城北徐公美①？”  
其妻曰：“君美甚②，徐公何能及君也？”城北徐公，齊國之美麗者也。…中略…

暮寝而思之，曰：“吾妻之美我者③，私我也；妾之美我者④，畏我也；客之美我者⑤，欲有求於我也。”

現代語訳：鄒忌は丈一八〇センチメートル余りあり、容姿が美しい。朝廷に出仕する時の正式な服装を整え、鏡を臨み込み、その妻に言うことには、「私は城の北側の徐行の美しさと比べてどうか①」と。その妻は、「あなたの美しさがまさっています②。徐公はどうしてあなたに及ぶことができるのでしょうか、いやできません。」…中略…。(鄒忌は)夕暮れ時に寝てこのことを考えて、私の妻が私を美しいとしたのは③、私をえこひいきしたからである。側室が私を美しいとしたのは④、私を恐れたからである。訪問客が私を美しいとしたのは⑤、私に何か請い求めようとするものがあつたからであると」言った。

文中の①と②のところに有る「美」は形容詞であり、③④⑤の「美」はまさしく形容詞を動詞に転用するものである。③④⑤の「美」を形容詞の「意動用法」とする研究者もいるが<sup>(5)</sup>、かねてからそれを批判する声があつた<sup>(6)</sup>。「意動用法」であれ、「他動詞用法」であれ、形容詞の「美」を動詞に転用したことは事実である。同様の例は他にも見られたため、以下に挙げる。

儒者在本朝則美政，在下位則美俗。 (『荀子・儒效』)

日本語訳：儒者は朝廷において政治を美しく、在野は風俗を美しくすべきである。

凡美田之法，绿豆為上，小豆、胡麻次之。 (賈思勰『齊民要術』 北魏)

日本語訳：(堆肥で) 田を肥やすには、绿豆は上、小豆と胡麻はその次である。

#### 4. 現代中国語における「美」の動詞性と古代中国語の関係

3のように、古代中国語において形容詞を動詞に転用することはしばしばあり、「美」という漢字にその現象を確認できた。しかし、現代中国語における「美」の動詞性獲得を古代中国語の動詞的用法に帰結できるのか。両者の影響関係を考えるには、三つの問題点に留意すべきである。

(一) 中国語言語学の見解によると、古代中国語における「美我」「美政」「美俗」

「美田」といった用法はあくまでも形容詞の「美」を臨時的に動詞に転用したものである。

(二) 現代中国語に見られる動詞性を有する「美白」「美髪」「美甲」「美容」「美体」等は何れも Beauty salon 関係の用語である。Beauty salon の範囲を超えた「美～」というVN（動詞 - 名詞）構造の単語は管見の限り皆無である。

(三) 「美白」「美髪」「美甲」「美容」「美体」の五つは古代中国語の資料でも一定数の用例を確認できたが、「美白」はAA（形容詞 - 形容詞）の構造、ほかの四つは何れもAN（形容詞 - 名詞）の構造で、現代のVA（動詞 - 形容詞）とVN（動詞 - 名詞）の構造は見当たらない。

ここでは問題点（三）に関して、古代中国語の使用例をそれぞれ一例ずつ示しておく。

(01) 宦者奏曰：“請切脈。”侍女捧後手置帷外，医見後手如柔荑，美白不可名状，悟為大貴之相。

（佚名『漢宮春色』 東晋）

侍女の手が新芽のように、美しく白く、その絶妙さは決して言葉で言い表せないものであるという意味を表すため、文中の「美白」はAA（形容詞 - 形容詞）の構造である。

(02) 身長七尺二寸，方口，美髪。

（范曄『後漢書』 南朝）

用例（02）は後漢明帝の馬皇后の容姿を描写するものである。文中の「美髪」はAN（形容詞 - 名詞）の構造で、「美しい髪」の意を表す。

(03) 惟東南諸郷於高阜地種之，雖不及茶場，亦美甲於他処。

（趙学敏『本草綱目拾遺』 清）

東南諸郷の台地で産出される棗は茶場（地名）に及ばない。それにしてもその良さ（美）はほかの所より優れている（甲）。文中の「美甲」は一語にあらず、正しくは「亦美、甲於他処。」と読むべきである。古代中国語において一語となる「美甲」（美しい爪）の用例を確認できなかった。

(04) 左右侍女数人。美容麗服。向所未睹。 (洪邁『夷堅志全集』 南宋)

数人の侍女が美しい容貌に華麗な衣装。それは今まで見たこともない。文中の「美容」はAN（形容詞 - 名詞）の構造で、「美しい容貌、顔立ち」の意を表す。

(05) 雖有賢才美体，無其爵不敢服其服。 (董仲舒『春秋繁露・服制』 前漢)

賢い才能と美しい体格を有するけれど、爵位がないためその服を着ることができない。文中の「美体」はやはりAN（形容詞 - 名詞）の構造で、「美しい体つき」の意を表す。

用例 (01) ～ (05) のように、古代中国語のなかには「美白」「美髪」「美甲」「美容」「美体」の五つがあるが、AA（形容詞 - 形容詞）の構造か、或いはAN（形容詞 - 名詞）の構造で、「美」という漢字の動詞性を確認できなかった。

## 5. 動詞の「美容」は日本語で成立された新語

4では、三つの問題点について、現代中国語における「美」という漢字の動詞性獲得と、古代中国語に見られる形容詞の動詞転用との影響関係を否定した。現代中国語における「美」という漢字はいつ頃、動詞性を獲得できたか、黄河清(2010)の中には下記の興味深い記述がある。

**美容** 使容貌美麗。1904年王景禧《日遊筆記》：“徒手体操亦名美容術，言正其容体也。” 1946年錢鐘書《圍城》二：“他在美国人花旗洋行里做了二十多年的事，從‘写字’（小書記）昇到買办，手里着实有錢。只生一個女兒，不惜工本地栽培，教会学校里所能伝授薰陶的洋本領、洋習氣，美容院理髮舖所能的帛造的洋時髦、洋姿態，無不所有尽有。”<sup>(7)</sup> (『近現代辞源』 2010)

黄河清の『近現代辞源』(2010)によると、動詞の「美容」は「使容貌美麗」（容貌を美しくする）の意味を表し、その初出は王景禧の『日遊筆記』（1904）となる。王景禧(1867-1932)は袁世凱による日本の学務を考察するという指示を受け、1903年9月1日に出発して日本に行き、同年の10月22日に帰国した。その『日遊筆記』は王景禧

が日本ででの見聞を記録したものである。当然のように、「徒手体操亦名美容術、言正其容体也」（徒手体操はまた美容術と言い、即ちその容体を正すこと。）は日本のことを言ったものである。

なお、王景禧の『日遊筆記』（1904）に見られる「美容術」に関して、物惣正明・飛田良文の『明治のことば辞典』（1986）の中には下記の記述がある。誕生当初の「美容術」は今言う「美容」とは意味が違い、「徒手体操」或いは「軽体操」（Light Gymnastic）に当たるようであるが、VN（動詞 - 名詞）の構造であることは確実である。

### びようじゅつ 美容術

〔教育学字彙・明19〕 軽体操 Light Gymnastic トハ規定運動ノ器械ヲ用ヒズシテ成ス所ノ運動或ハ之ヲ用フルモ劇ニ渋ラザル所ノ運動ニシテ所謂美容術トハ此義ナリ。

〔新訳和英辞典・明42〕 The art of beauty.

〔新式辞典・大1〕 美顔術に同じ。⇨美顔術 顔面の脂肪を去り鼻を高めなどして容貌を美しく見せる術。

▽意味 明治時代の新語。<sup>(8)</sup>

（『明治のことば辞典』 1986）

## 6. 日本語で動詞性を獲得できた「美」という漢字

日本語のなかの「美」という漢字には日本語ならではの難しさがある。それは字音と字訓の存在である。『字通』『日本国語大辞典 第二版』などの資料によると、「美」の字訓には「うつくしい」「すぐれる」「めでたい」「よい」「よみする」「ほめる」「みちる」「さかん」「ただしい」「たのしむ」「よろこぶ」「さいわい」等たくさんある。これらを中国語のなかの「美」の品詞に照らし合わせると、形容詞の「うつくしい」「めでたい」等はまず問題ない。しかし、「すぐれる」「みちる」等の自動詞は一見して中国語には見当たらないが、これはあくまでも異なる種類の言語がもたらしてくる齟齬に過ぎない。例えば、中国語では「緊張」「腐敗」「興奮」「繁栄」などは形容詞であるのに対して、日本語では自動詞となる。一方、「ほめる」「たのしむ」等の字訓は他動詞性を有するものの、該当する語例は「美刺」<sup>(9)</sup>の一例のみである。「美人」「美音」「美貌」「美材」といった「美」を前置語基とする数多くの漢語を見ると、中国人と同じように日本人にとっても一般的に「美」という漢字は形容詞と意識されるだろう。

先にも述べたが、現代日本語における「美」という漢字の動詞性はもっぱら「美容」

「美髪」「美肌」「美白」「美爪」「美顔」「美形」「美眉」「美身」といった美容系の単語に反映されている。Beauty salon 系に集中することは中国語と見事に合致していて、無論これは偶然の一致ではないことが明白である。ただ、ややこしいことは上記の Beauty salon 系単語は、理屈的にAN（形容詞 - 名詞）構造の“モノ”と、VN（動詞 - 名詞）の“コト”の二義性を有している。しかし、実際の言語生活では一体モノなのか、それともコトなのか、かなりのバラツキが見られる。例えば、「美顔」「美容」の二つは辞書的にはAN（形容詞 - 名詞）構造の「美しい顔付き」「美しい容貌」とも解釈できるが、実際の言語生活では「美顔術」「美顔ローラー」、あるいは「美容院」「美容達人」に代表されるように、もっぱらVN（動詞 - 名詞）の動詞として使われるだろう。一方、「美肌」「美爪」<sup>(10)</sup>の二つは「美肌サロン」「美爪屋」なら動詞ではあるが、一般的に名詞と見做されているだろう。いずれにせよ、現代日本語における「美」という漢字の動詞性も Beauty salon 系の単語に反映されている。

5で論じたように、現代中国語における動詞の「美容」は日本語由来のものであるため、ここでは「美容」を代表例として日本語における「美」の動詞性獲得について考察してみる。結論を先に述べると、日本語における「美」の動詞性獲得は「美顔」「美容」といった“モノ”を表す漢語を、日本人は“コト”を表す漢語として再解釈することに由来するのである。

## び - よう 【美容】

### (1) 美しい顔かたち。

＊仮名草子・竹斎〔一六二一～二三〕上「形は嬋娟びようにして、輕漾激し影脣を動かせば」

＊田舎教師〔一九〇九〕〈田山花袋〉四三「美容（ビョウ）花の如くであった」

＊楚辞 - 九章・惜往日「雖有西施之美容、讒妬入以自代」

(2) 顔かたちを美しくすること。また、化粧、結髪、パーマネントウェーブなどによって容姿を美しくすることをいう。→理容。

＊浮世草子・好色万金丹〔一六九四〕二・二「天下の美容（ビョウ）色道もここを摸せば」

＊最新実用衣服と整容法〔一九二八〕〈青木良吉〉「美容お化粧と云ふに同じ、但し、整容の意のこともある」  
（『日本国語大辞典 第二版』 2002）



『日本国語大辞典 第二版』(2002)の記述によると、日本語では「美容」は早い段階で動詞性を獲得していたようである。一方、筆者が東京大学史料編纂所の古文書資料と『日本古典文学全集』を調べてみたところ、いずれも中国語本来のAN(形容詞-名詞)構造で、動詞としての「美容」を確認できなかった。

(06) 賢乃常忠公之子、賢有美容貌、善歌舞。

(太極『碧山日録』 1462)

(07) 内儀は今李夫人とて、美容のほまれたかく。

(夜食時分『好色敗毒散』 1703)

(08) フヤ / \ 大そふに娘がそろつて来たぜ。何れもみんな美容<sup>(11)</sup>なア。

(為永春水『春告鳥』 1836-1837)

筆者の調査範囲で「美容」が動詞性を獲得できたのは、『改正小学美容術』(遊佐盈作 1885)が一番早かった。そして、一八八五年四月十日付の『朝日新聞』に下記広告が載っている

該書ハ遊佐先生嚮キニ東京体操伝習所ニ於テ研究ヲ遂ケラレ小学ニ実施シ小学生徒ノ体操科美容術ヲ習フニ至便ナランヲ計リ詳細ニ順序ヲ書き并図書ヲ設ケ。…以下省略…。  
(『朝日新聞』 1885年4月10日)

「美容術」という表現であるため、「容を美にする術」としか解釈できず、よって、文中の「美容」は動詞性を獲得できたと思われる。しかし、書名の『改正小学美容術』にしても、あるいは広告の「小学生徒ノ体操科美容術ヲ習フ」というフレーズにしても、現代人の我々には「小学生も美容術か」と驚愕するものである。

美容術ハ身体ヲシテ美容強壮ナラシムルノ体育法ニシテ器械ヲ携ヘズ空手ニテ行ヒ得ルモノトス故ニ諸種ノ体操ヲ修メント欲スルニ当テハ先ツ此術ヲ学ブ可シ。  
(遊佐盈作『改正小学美容術』 1885)

作者・遊佐盈作による説明を読むと、書名にある「美容術」は正確には「美容強壮術」の略語である。「美容術=美容強壮術=徒手体操(Light Gymnastic)」という作者

此艶の雫ハ理化学と医学との原理に基き多年経験發明せし者にて其効能色を白くし○きめをこまかにし○にきび○そばかす○あせもを除き○ひび○あかぎれ○唇のあれを治し○できもの○ほうそうの傷を消し。…以下省略…



## 7. 「美容」が日本語で動詞性を獲得できた原理

-44-

語の感覚に沿った再解釈に当たる。

しかし、「吐血」と「美容」の例には大きな違いがある。「吐血」の場合は、動詞句のVN（動詞 - 名詞）構造を、連体修飾のVN（動詞 - 名詞）構造へと再解釈するものである。漢字「吐」の品詞が変わったわけではない。一方、「美容」の場合はAN（形容詞 - 名詞）構造を、VN（動詞 - 名詞）構造へと再解釈したものとなる。漢字「美」の品詞が変わったわけである。「吐血」と似た例は「放水」「流血」等など枚挙にいとまがない。一方、「美容」と似た用例は非常に少なく、筆者は「精米」の一例しか思いつかない。

本来、中国語では「精密」「精力」が示すように、「精」という漢字は形容詞と名詞を兼ねている。一方、「精米」の場合となると、AN（形容詞 - 名詞）構造の“モノ”と、VN（動詞 - 名詞）構造の“コト”の二義性を有する。“モノ”の「精米」は古くからあったのに対して、“コト”の「精米」は「精米機」とともに近代において日本から入ってきたものであると考えられる。

(09) 又聞兵庫縣精米公司汽船龍平丸亦於二十一號午後十點鐘遇暴風雨觸礁沈沒。

(覆船疊見『申報』 1890年10月19日)

(10) 合衆国紐育州西臘扣斯之英克哀爾排穉精米機械会社之持許英克哀爾排穉精米機械其設計最新而構造極簡故易使用無論何人皆能用之。…中略…、製造会社之本邦代表者乃横浜市太田町六丁目九十七番地曾我淳二郎氏也。

(英克哀爾排穉精米機械『農學報』第290期 1905)

用例(09)は兵庫県の精米会社に所属する船の沈没事件を報道する内容である。用例(10)は中国の『農學報』が米国産の「精米機械」を紹介するものであるが、文末の「製造会社之本邦代表者乃横浜市太田町六丁目九十七番地曾我淳二郎氏也」を見れば、本文は和文の中国語訳であることが分かった。

日本語において「美容」が“モノ”から“コト”へと変化したのは、日本人の再解釈によるものであるが、それができる原理は「する」というサ変動詞の存在と考えられる。本来動詞性を有しない漢字、漢語に「する」をつけて動詞的に解釈できるわけである。身近な一例を挙げると、筆者の内省では「哲学」は疑いなく名詞であると思っていたが、ある日、「人生を哲学する。」というフレーズに遭遇して少々驚きながらも、「人生を哲学的に考えることだろう。」という推測がすぐにできた。

## 8. まとめ

現代中国語において「美容」「美髪」「美白」といった言葉に代表されるように、「美」という漢字の動詞性は一般的に認められている。しかし、古来より中国語では「美」という漢字は形容詞として認識されていた。語尾変化のない中国語では、形容詞を動詞に転用することはよくある現象ではあるが、それはあくまでも文章表現上の技法の域を出ない。現代中国語における「美」という漢字の動詞性は、日本語で成立された動詞の「美容」などがもたらしたものである。そして、言葉の類推により日本語にはない「美甲」「美臀」「美腿」という動詞性を有する単語も生まれた。

一方、日本語における「美」という漢字には、「うつくしい」「すぐれる」「ほめる」など複数の和訓が当てられるが、中国語と同様に「美」は一般的に形容詞の性質を有する漢字として認識される。日本語において「美」という漢字が動詞の性質を獲得できたのは明治初期のことであり、その筆頭語例として「美容」というものである。言葉が大きく変貌し、漢語が急増していた明治時代、サ変動詞「する」の働きにより、日本人は「美容」を再解釈して、VN（動詞 - 名詞）構造で「容貌を美しくする」という“コト”へと改造したのである。こうして、日本語において「美」という漢字は動詞の性質を獲得できたのだ。そして、類推効果により「美顔」「美爪」といった動詞性をも有する漢語が産出されたのである。

### 【注】

- (1) 新華漢語詞典編纂委員会『新華漢語詞典 新修訂版』（商務印書館国際有限公司、2007）671-672 頁。
- (2) 中国社会科学院語言研究所詞典編輯室『現代漢語詞典 第6版』（商務印書館、2012）883-884 頁。
- (3) 無論、現代中国語では「美」は「美国」（アメリカ）、或いは「美洲」（米州、つまり南米と北米の総称）の略称としても頻繁に使われる。ほかには「成人之美」「美不勝収」のように、ごく僅かな場合に限って「美しい事」という意味を表すこともある。
- (4) 日本語訳はネット上のものを引用する。
- (5) 郭錫良『古代漢語』（北京出版社、1981）150 頁、273 頁。
- (6) 趙秀梅「《鄒忌諷齊王納諫》“美我”訓釈之商榷」（『荷澤師專學報』1996 年第一期）
- (7) 黄河清『近現代辞源』（上海辞書出版社、2010）518 頁。
- (8) 物惣正明・飛田良文の『明治のことば辞典』（東京堂出版、1986）488 頁。
- (9) 「美刺」は「褒めることと、貶すこと」の意味を表す。使用例としては、「善惡智愚醇功過、あらゆる美刺褒貶は人々の見る所に従って自由に下すことを得る判断である。」（森鷗外『伊沢蘭軒』1916-1917）がある。
- (10) 「美肌」（びはだ）は重箱読み、「美爪」は「びそう」という漢音読みよりも、「びつめ」の読みの方が日本人には馴染みやすいだろう。しかし、本論文は「美」の動詞性に着目するものであるため、読み方の問題は看過する。

(11) 「美容」に「うつくしい」のルビが付されている。

**【付記】**

本稿は2020年度陝西省社会科学基金年度項目（課題番号2020K020）、2020年度教育部人文社会科学研究青年基金項目（課題番号20YJC740070）、2019年度西安理工大学人文外語与芸術専項項目（課題番号2019RY002）、2019年度西安理工大学教育教学改革研究項目（課題番号Xjy1942）の研究成果の一部である。